

情緒障害児等の学習指導に関する研究 (第3報)

—教科学習と言語発達の関係—

研究第6部 権平俊子・山本清恵
柴田良一
心理治療室 結城静子

I はじめに

本研究で、対象児とした情緒障害児等は、ことばの遅れ、落ちつきがない、集団からはずれる等の主訴で、当所に相談に来所したものである。従来、これらの対象児については、遊戯治療とそれと併行して母親にカウンセリングを行い、その問題の解決に努めてきた。しかし、対象児は就学後学習場面で勝手な行動をとるなどして不適応を示したり、また知的能力のアンバランスなどが原因で学習面でのつまずきを示すことが多い。そこで、これらの子ども達に、適切な学習面での指導をすることにより、一層の問題解決が計れるのではないかと考え、昭和50年4月より、われわれはこれらの対象児に対して学習指導を行い効果を挙げた。われわれが行った学習指導の理論及び方法については、すでに紀要第14集に報告した。学習指導の実際の過程は、算教科の問題の形をとった材料を用いて、(1)学習予測テスト、(2)学習診断テスト及びその結果の整理(プロファイル作製)(3)その結果にもとづいた親と子に対する個別指導である。そこで、数年間にわたって行った学習指導の結果をまとめ、ここに報告する。

II 目的

情緒障害児に対しその問題を解決するために行う心理治療等においても、それぞれの症状に適した最も効果的な治療法を行う努力がなされている。それと同様に学習障害についても、その子の状態(例えば、言語理解の遅れている子ども、記憶だけがとくに優れている子ども、交流のつきにくい子どもなど)に合った方法を考えだすことによって、より効果的な学習指導ができると思われる。われわれが数年間に扱った百余人の対象児達も、それぞれ様々な問題を持っている子どもである。紀要第15集では、3歳時から遊戯治療をして「ことばの遅れや情

緒障害、の改善に努め、1年就学猶予、して小学校へ入学、続いて入学当初から学習指導を行ってきた事例についての結果を報告した。今回は、われわれの行ってきた学習指導法全体にわたって多角的に検討を加え、その結果を報告する。そしてこの結果から更に研究を続け、これらの子どものそれぞれの状態に合った指導方法を開発していくつもりである。

III 方法及び結果

(1) 対象

昭和50年4月より現在(昭和55年7月)までに、情緒障害児等で学習障害を起した子ども106名に対して、毎月1回(8月を除く年11回)学習指導を行ってきた。第1表は、昭和50年度より昭和55年度までの各年度で扱った対象児(学期毎の者を除く)の学年別IQ(鈴木ビネー式による)の表である。

第1表の対象児の中で、入学時に1年就学猶予をした者は、昭和50年度3名、昭和51年度3名、昭和52年度4名、昭和53年度3名、昭和54年度4名、昭和55年度7名である。また、特殊学級に属している者は、昭和51年度2名、昭和52年度2名、昭和53年度3名、昭和54年度3名、昭和55年度は中学生に1名である。また脳損傷あるいは脳機能障害のある者は投薬治療を行っているが、その数は各年度とも半数乃至 $\frac{2}{3}$ である。

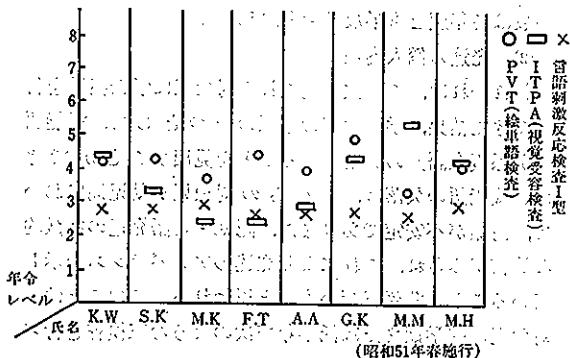
(2) 発達の個人内差

われわれは、この数年間これら対象児に学習指導を行ってきた結果、学習障害の原因の一つとして、機能語(関係概念語)の欠落があることを見出すことができた。機能語の欠落は、これらの対象児が幼児期において、情緒が不安定でありまた、認知・言語発達の特徴的な障害がみられ、これにより発達のアンバランスを示していることと関係が深いものと思われる。このことは、対象児の就学期または低学年で次のような三検査を行っ

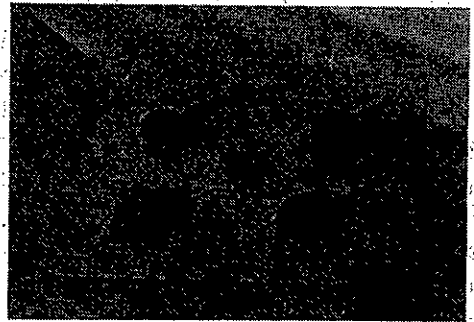
第1表 各年度対象児の学年別IQ

年度	学年	IQ						中	計
		1	2	3	4	5	6		
50年度	95以上	1		5	3	1	1		11
	85~94	2		2		1			5
	75~84	1	1						2
	74以下	2	1		1				4
計		6	2	7	4	2	1		22
51年度	95以上	1	2	2	3	4	2		14
	85~94	1	1	1	2		1		6
	75~84	3	2	2			1		8
	74以下	2	4	1	1	3			11
計		7	9	6	6	7	4		39
52年度	95以上		2	1		2	4		9
	85~94	4	4	2	1	2			13
	75~84	1	1	3	4				9
	74以下	2	2	2	1	1	4		10
計		7	7	8	6	5	8		41
53年度	95以上		1	2	1	1	2		7
	85~94	2	3		1	1	2		9
	75~84			3	2	1			6
	74以下		3		5	3	1	3	15
計		2	7	5	9	6	5	3	37
54年度	95以上			2	1		3		6
	85~94		2	3		1	1		7
	75~84	1			3	2	2		8
	74以下	2	1	3		4	3	3	16
計		3	3	8	4	7	9	3	37
55年度	95以上	1			1	2			4
	85~94	1	1	2	3		2		9
	75~84	1	1	1		1	2		6
	74以下		4	1	3		3	5	16
計		3	6	4	7	3	7	5	35

第1図 就学時における個人内差



た結果、個人内差が顕著にあらわれていることから明らかに示されている。即ち第1図の例に示すように、PVT絵単語検査は4~5歳レベル、ITPA視覚受容検査は2.5~5.5歳レベルであるが、言語刺激反応検査Ⅰ型は一律に3歳以下にとどまっている。前二検査は刺激語と絵のマッチングであるため、単語が理解できれば比較的容易にできる検査である。しかし、言語刺激反応検査Ⅰ型の結果が他検査のそれと比べて低いことは、対象児のことばの理解及び、関係の認知の把握についてのつまずきを示していると考えられる。この言語刺激反応検査はⅠ型、Ⅱ型(次に述べる検査)とも、東京都立心身障害者福祉センターの石戸谷氏の考案によるものである。言語刺激反応検査Ⅰ型は次の写真に示した器具を用いて、検査者の発問(資料Ⅰ参照)によって行うものである。



言語刺激反応検査Ⅰ型器具

(3) 機能語(関係概念語)の欠落
 <言語刺激反応検査Ⅱ型>

対象児のことばの理解の状態を更に広く調べるために、言語刺激反応検査Ⅱ型を昭和54年3月に対象児23名に行ったところ、前出検査Ⅰ型と似たような傾向がみられた。この検査は、やや高度でⅠ型が器具を用いての作業であるのに対して、資料Ⅱに一部を示したが、○△□の青赤黄の3色の大中小の平面図型からなる3つの選択図と、その左側に問が文章で書いてある30枚のカードで行うものである。検査施行は個別で行い、子どもに問を声を出して読ませる。よく読めない子どもに対しては、検査者が読むか、子どもと一緒に読む。(2回までは繰り返して読んでよい)

この検査についてはまだ標準化されていないので、結果の検討にあたって普通児(幼児)にも同検査を行い、比較検討をした。

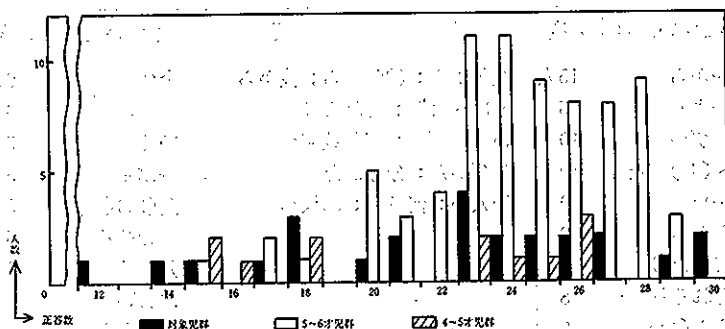
<言語刺激反応検査Ⅱ型を普通児(幼児)に行った結果との比較>

日立市の幼稚園の5~6歳児(1年保育児)77名、4

第2表 言語刺激反応検査Ⅱ型
(対象児と幼稚園児の比較)

群別 正答数	対象児 N=23	5~6 歳児 N=77	4~5 歳児 N=12
30(満点)		2	
29	1	3	
28		9	
27	2	8	
26	2	8	3
25	2	9	1
24	2	11	1
23	4	11	2
22		4	
21	2	3	
20	1	5	
19			
18	3	1	2
17	1	2	
16			1
15	1	1	2
14	1		
13			
12	1		

第2図 言語刺激反応検査Ⅱ型の各群正答数の分布



第3表 言語刺激反応検査Ⅱ型の各問通過率

カード No.	対象児	5~6 歳児	4~5 歳児	カード No.	対象児	5~6 歳児	4~5 歳児
1	96%	100%	100%	16	78%	91%	67%
2	78	99	99	17	78	86	75
3	74	100	100	18	74	81	75
4	83	90	92	19	78	90	75
5	91	97	92	20	91	100	100
6	78	99	100	21	70	71	67
7	96	99	100	22	91	77	42
8	87	99	75	23	70	79	50
9	87	92	92	24	52	56	33
10	35	52	8	25	83	87	67
11	70	56	83	26	74	86	75
12	87	77	92	27	43	47	33
13	78	88	58	28	35	58	58
14	74	75	75	29	22	65	25
15	83	92	92	30	35	60	42

～5歳児(2年保育児)12名に同検査を同じ方法で行った。第2表及び第2図に示すとおり、5～6歳児群では全問正答者2名、25問以上正答者は半数もいるのに対して、対象児群は全問正答者は無く、25問以上の者も殆ど満たない。第2図によれば対象児群の正答分布は散らばりがやや大きい。平均値は30問中対象児群が21.7問、5～6歳児群は24.5問、4～5歳児群は21.3問である。対象児群と5～6歳児群の平均値には1%の危険率で有意差が認められる。つぎに下位検査についていうと、50%以下の通過率を示すカードは対象児群は5枚、5～6歳児群では1枚、4～5歳児群は7枚である。(第3表参照) それらに次ぐ低通過率(50～70%)のカードは対象児群に3枚、5～6歳児群に6枚、4～5歳児群は5枚ある。3群ともカード10の解答につまずいている率が多い。これは「左から3ばんめは大きな三角です」という問に対して資料Ⅱの選択図3面のうち上段が正解であるのに下段と答える者が多い。左右の定着の未発達さがうかがわれる。カード27、29、30についても3群共に低通過率で、ともに「丸と四角をあわせると」または「あわせても」という文で始まる「同じ」「多い」「少ない」の量

の比較である。2つの機能語が重なっているわけである。また、カード28は「いちばん多い」「いちばん少い」という最上級の量の比較であるが、これも3群とも低通過率を示している。同様に最上級の比較でもカード16では大きさを比べているが高通過率である。従ってカード28及び、27、29、30の解答につまずいたのは、量の認知の未発達さ、即ち量に対する機能語の理解がまだ充分にできていないためと思われる。その他、カード24では「ひとつずつ」という機能語につまずいたとみられる。

以上のことから、対象児は小学校1年～5年に在学中であるのに、上記のようなことばがまだ理解されていないことがわかった。この点からみて、これらのことばは算数問題文の中に頻りに出てきているのであるからこれらが十分に理解されていないために、算数科の問題を解く時のつまずきとなって、解答ができなくなる。これが学習障害の大きな原因になっているのではないかと考えることができる。つぎに上記の低通過率のカードについて対象児を学年別にしてみると「量の比較」(カード27、28、29、30)では全般的に低い「順序」(カード10)

第4表 算数学習につまずいたことば

つまずいた語	頻度	摘 要	つまずいた語	頻度	摘 要
～から	15人	全体から；○時から；後から	全体	6人	
～より	15	～は～より；それより	～だけ	6	はんぶんだけ；○人だけ
～ずつ	10	いくつずつ；同じ数ずつ	いくつ	5	
～(し)かた	10	並びかた；分けかた	～ぶん	5	○人ぶん；ひとりぶん
～め	9	○人め；何番め；○枚め	間(に)(の)	5	
どちら	8		あわせる	5	動 詞
どれだけ	8		分ける	5	動 詞
それぞれ	8		おおい	5	形容詞
もと(の)	8	もとの数	ちょうど	5	
くらべる	7		また	5	
～で	7	全部で；全体で；みんなで	～には	5	
ちがひ	6		～に	5	はじめに；20cmになる
かさ	6	量			

「ひとつずつ」(カード24)では4～5年生は全員正答である。上級になると多少とも機能語の習得が増していることがうかがわれる。

＜算数文章題でつまずくことば＞

それ以前(昭和51～52年度)に対象児の母親11人に、学習障害の一つの要因としてことばの発達に障害があったことを説明して、算数学習中に問題文の中で対象児の文章理解を妨げていることばを記録させた。その結果は第4表(紀要第14集の再出)に示すとおりである。順序及び起点をあらわす「～から」、比較を示す「～より」、等分の「～ずつ」に対象児のつまずく頻度が多い。前記の言語刺激反応検査Ⅱ型と似たようなことばが抽出された。そこで、これらのことばを使った比較的易しい文章題(資料Ⅲ)を昭和53年度の対象児中3～6年生21名に解かせた。一方、都内の小学校3年生の1学級42名にも同じ問題を行い、それを比較したのが第5表である。

第5表 「第4表の機能語」の入った文章題の通過率

学年	3	4	5	6	全	普 3
(1)	40%	40%	80%	80%	60%	83%
(2)	60	40	80	80	65	83
(3) イ	60	40	80	60	60	76
(3) ロ	20	0	0	40	15	19
(4)	0	40	20	80	35	64
(5)	40	40	80	80	60	71
(6)	20	0	20	80	30	50
N	5	5	5	5	20	42人

(53年春施行)

やはり、対象児全体についていえば、普通学級3年生

の通過率に及ばない。しかし、6年生になると、5人中2人は満点、1人は問(3)の口のみに失敗をしたが、低学年や3年普通児より高い通過率である。下位検査でいうと対象児、3年普通児とも問(6)の口が低い。これは、見落してしまったという見方もできるが、むしろ「ふたりぶん」という機能語の理解が難かしかったからだと思われる。問(6)が低通過率を示したのは、「どちらがどれだけ」という聞き方のためであろうか。正答者の多い問(1)でも同じ聞き方であることからむしろ時間の要因や問題文の複雑さ等からことばによるイメージ化の操作が難かしかったからだと思われる。

以上、普通児に比べて対象児が関係概念をあらわす機能語に多くの欠落があることがわかった。これが対象児の学習障害の原因の一つであると考えられる。つぎに、学習指導の実際についての結果を述べる。

(4) 学習予測テスト

学習指導の開始期に、学力の推定のために予め行う学習予測テスト(資料Ⅳ参照)では対象児は約80%の者が3年生レベルまでの学力しか認められない。このテストの結果の目安としては、60問中正解が26問までの者は1年生、38問までは2年生、45問までは3年生としている。それに対応した学年レベルの学習診断テストを行うためのものである。これは、テスト内容でもわかるように指導開始期に、少くとも1年生の学力の認められる者だけに行ってきた。第6表は開始期から2年未満で行った最初の同テストの結果である。このテストについては、紀要第14集に詳しく述べてあるが、算数科の教科内容を用い、式をことばで表現した文中に数字で答を記入する形である。従って学習予測テストの成就率が低いと

いうことは、教科の未習得ばかりでなくこれまでの発達において機能語が十分に習得されていないためと判断できる。なお、対象児におけるIQ（殆んどが就学前後に測定）と同テストの相関々係（第3図）は高いとはいえないが、一応認められる。

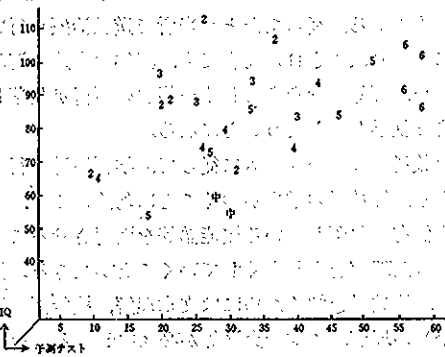
第6表 指導開始期における対象児の学習予測テスト

上段 開始から1年未満で施行
下段 開始から2年未満で施行

通過問題	学年	1	2	3	4	5	6	中学	計
26問まで	上段	1	19	3	5	4	1	1	34
	下段			4	2		1	1	8
38問まで	上段	1		3	3	1	1		9
	下段			1	1				2
45問まで	上段			3	2	1		1	7
	下段			1					1
50問まで	上段				1	5			6
	下段								
51問以上	上段					2	1	1	4
	下段								
計		2	19	15	14	13	4	4	71

（注）学年は指導開始当時の在籍学年）

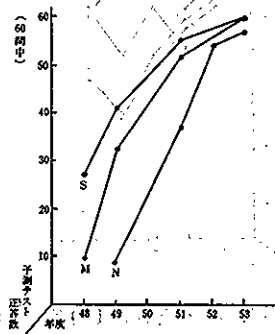
第3図 対象児のIQと予測テストの相関図（昭和53年度末）N=26 r=0.52（数字は在籍学年）



また、このテストは毎年度末にも施行し、対象児の言語習得の目安にしてきた。第4図はわれわれが学習指導を開始した昭和50年4月（3年生在学）から参加して、昭和54年3月に小学校を卒業した3名についての学習予測テストの伸びを示したものである。第4図のSは入学時から指導を開始したためか1年生の年度末にはすでに、普通児並の正答数に到達していた。他の2名については、第4図でみるとおり、4～5年生から著しい伸び

を示した。この3名はいずれも幼児期から当所で遊戯治療を行っていた事例で、われわれが学習指導を開始する以前から個別に指導していた。

第4図 学習予測テストの伸び（3名について）



(6) 学習診断テスト

学習診断テストは標準化された学力テストとは違って、算数科の教材から各学年の領域単元を教科書に沿って基礎の用語技法を用いて出題しており、対象児の学力の弱点を明らかにして、直ちに個別指導へと結びつけるためのものである。われわれの学習指導法の骨子は、対象児の算数学習のつまずきを見つけて、1ヵ月毎にその指導法を母親に助言し、それにもとずいて母親が子どもを指導して改善に努める。最終的に発達のアンバランスを埋めて、バランスのとれた能力になるようにしていくものである。そこで、この数年間の学習指導で対象児の学力の伸びはみられたか検討してみたい。

<学習診断テストを言語面から分析した結果>

各対象児の最初の学習診断テストの結果と昭和54年3月に行なったそれとについて、次のように分類し比較検討した。

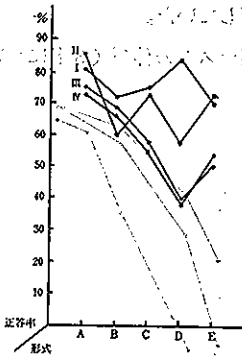
- 各学年レベルの学習診断テストの問題を出題形式により、A～Eに分けて、
- A — 数又は計算（1桁以内）
- B — 図の中で解く（グラフ、数直線等）
- C — 図形
- D — 図示の補助のある文章題
- E — 文章のみの文章題

に分けて、

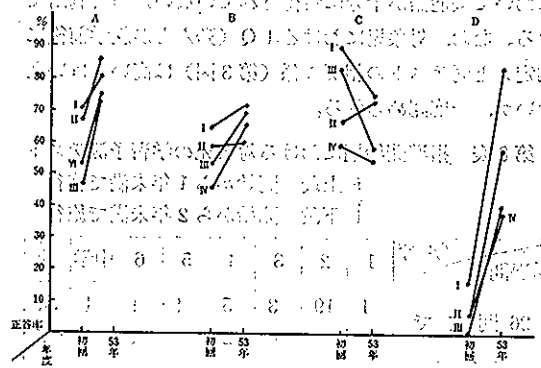
- (1) IQ別出題形式別成就率の比較
- (2) IQ別出題形式別伸び方の比較

をする。昭和53年度の対象児中26名（2年生～中学1年生）について、I群はIQ95以上で6名、II群は85～94で8名、III群は75～84で4名、IV群は74以下で8名の4群に分けて、①昭和54年3月の学習診断テストについ

第5図 各I:Q群の学習診断テストの
出題形式別プロファイル



第6図 各I:Q群における学習診断テストの伸び



て出題形式A～EのそれぞれのI:Q各群の成就率の平均の比較、② 各対象児の指導開始期の学習診断テスト(2名を除いて1年レベルを施行)と昭和54年3月の同テスト(IV群を除くと殆どどの者が在籍学年レベルを施行)について、各I:Q群の出題形式別の成就率の平均を比べて両期の変化をみる。第5図及び第6図に示すように、I:Qにかかわらず「数または計算」が一番成就率が高い。そして、学習することによってかなり伸びることができる。これについて数値線やグラフ等のB形式の問題もある程度伸びてゐる。しかし、いわゆる幾何学的な図形問題(C形式)では、I:Qと成就率の間に多少の相関関係が予想される。そしてこの問題形式の伸びはあるとはいえ、対象児の図形把握の困難さがうかがわれる。文章題に補助の図示があるD形式ではII群は60%以下の成就率、III、IV群は40%という低率を示した。これは開始期では4群共20%以下という状態であり、対象児の殆どが恐らく文章題の全てができなかったためと考えられる。文章題のみのE形式は問題文が短かく、特に低学年では問そのものがD形式より易しい。従って、II、III、IV群では、D形式より成就率が高い。文章題はI:Qの高いI、II群はよくできて、III、IV群が低い。また文章のみの文章題は1年生レベルのテストにはないために、E形式については伸びを測ることができない。

総じて「数または計算」については、対象児殆どに学習指導の効果があつた。その他の問題は、対象児の知能程度が学習の伸びにかなり関係があると思われる。

V 考 察

以上、紀要第14集の「情緒障害児等に対する学習指導」の理論と方法にひきつづいて、学習指導の実際と結果につき、ここで扱つた対象児の多様さ、流動性を加味した

一つの傾向として報告した。臨床的立場から今後対象児のそれぞれについて最も適した指導を行い、障害を改善することを最終的には考えていくことを目的として逐年的に更に研究をすすめ、また中学高校進学後の状態も加味しながら、長期間にわたり研究を続けていきたいと考えている。その点をふまえた上で、学習障害について次のような傾向を見出すことができた。

1 幼児期における情緒障害がかなり改善されているようでも、就学後一斉授業がらはずれるなど集団生活において不適応を示し、学習にまづきを起す例が多い。また情緒障害児の中には、発達のアンバランスがあり、3歳前に字が読めるし、書けるが、意志の疎通がなく、更にことばも一語文、二語文の自発語のみなどの状態を示す子どももある。従つてたとえ当所で遊戯治療を行い情緒的にかなり改善された場合でも、認知の発達に遅れがあるため、関係概念をあらゆる機能語の習得が欠落しているまま就学してしまうことになる。

2 算数科のカリキュラムに従つて、学習指導を行うことにより、算数科の学力がつくことは勿論のこと、その子ども個々の欠落している機能語等を習得させることにより、言語理解をよりよくしていくことができる。換言すれば、算数科を解くためには文章理解、機能語(関係概念語)の理解、認知の発達等が必須である。その上で、帰納法や演繹法につながる操作を少しでも理解していくことができれば、これによって他との交流を円滑にするのに大いに役立つことになる。

3 更に付け加へれば、学習障害の改善をはかるには母親の協力が必要である。即ち、母親が子どもの状態を理解して根気よく適切な指導をしていくことができるということが、この方法を行う上で最も大切である。従つて情緒障害の子どもに対して遊戯治療と母親のカウンセリングを行うのと同様に、学習障害の場合も母親に対しカ

ウンセリングを行い、子どもの状態の正確な把握と母親のあせりや不安を解消していくことが必要である。

4：われわれがこの数年来行ってきた学習指導は、内容からみて当然就学期以降に始まるものであるが、幼児期に何らかの症状を訴えて当所を訪れた情緒障害児の中には、学習障害を起した子どもも多い。これまで行ってきた学習指導の結果にもとずき、これらの子どもに対して幼児期からその障害の改善をはかる方法を開発していき学習障害を予防したいと考えている。

（本研究は東京都立心身障害者福祉センター聴力言語障害課長石戸谷栄一氏、同幼児科小田正敏氏、並びに研

修生、研修終了生の方々及び池上みち、結城達也の諸氏の協力によるものである。）

〔参考文献〕

- 1) 権平俊子他「情緒障害児の学業指導に関する研究」日本総合愛育研究所紀要 第14集 昭和53年
- 2) 同上（第2報） 第15集 昭和54年
- 3) 中村哲雄他「学習障害児の機能語定着についての考察」筑波大学心身障害学研究、第2巻
- 4) 川井恵他「不聴覚障害児の言語指導」No.2（難聴児を持つ親の会） 昭和53年

資料Ⅰ 言語刺激反応検査Ⅰ型記録用紙（抜粋）

No.	刺 激 語	正誤
1	赤はどれですか	
2	桃色はどれですか	
10	桃色と黄色をとりましょう（外へだす）	
11	残りは何色ですか	
12	大きい丸を入れなさい	
13	小さい丸も入れなさい	
14	この形は何ですか（三角）	
15	桃色より大きいのはどれですか	
26	高い方はどれですか（赤と桃色）	
27	横にならべなさい（外に全部重ねてから）	
28	大きい順にならべなさい（黄・緑・青）	
29	おはじきを1個ずつのせなさい*	
		合計
	* 29、おはじきを7個用意する	

資料Ⅱ 言語・刺激反応検査Ⅱ型（抜粋カード）

R……赤 B……青 Y……黄

カード

1

ぜんぶ赤い丸です

R	B	B
R	R	B
R	R	R

2

丸がひとつ三角がふたつあります

B	B	B
B	B	B
B	B	B

3

まんなかにな大きな三角があります

A	B	A
B	A	B
A	A	B

4

赤も青も黄もみんな三角です

R	B	Y
Y	R	B
R	B	B

9

右と左が同じ色でまんなかか黄です

R	Y	R
B	R	B
R	Y	Y

10

左から3ばんめは大きな三角です

A	A	B
B	B	B
B	B	B

11

右からふたつめは
背い小さな丸です

16

背い丸がいちばん小さい
赤い丸がいちばん大きい
です

24

三角と丸がひとつ
ずつあります

27

丸と四角をあわせると
三角のかずと同じです

28

三角がいちばん多くて
丸がいちばん少ないです

29

丸と四角をあわせると
三角より多いです

30

丸と四角をあわせても
三角より少ないです

資料Ⅲ 学習につまづいた機能語による文章題

- (1) まさおさんは、画用紙を15まい、ただじさんは12まい持っています。どちらがどれだけ多く持っていますか。
- (2) 5人の子どもが、それぞれ8まいずつ名ふだを持っています。全体で何まい名ふだがありますか。
- (3) (イ) 12このアメを3人で同じ数ずつ分けると1人は何こずつもらえますか。
(ロ) また、ふたりぶんでは何こもらえますか。
- (4) としお君は、れつの前から3ばんめ、うしろから5ばんめです。全部で何人の子どもがいますか。
- (6) 太郎さんの身長は130cm、花子さんの身長は太郎さんより15cmひくいそうです。花子さんの身長はどれだけですか。
- (6) 太郎さんの家から学校までは、ちょうど15分、学校から駅まではちょうど10分かかります。家から学校までと学校から駅までとはどちらがどれだけ多くかかりますか。

資料Ⅳ 学習予測テスト検査用紙(抜粋)

- に3をたすと5 6は□の2分の一
- に4をかけると12 5は15の□分の一
- 5に□をたすと8 □円の鉛筆4本の代金は
- 4に5をかけると□ 60円
- の3倍は12 □度は30度と60度
- 5の□倍は15 ½は小数では□
- 7の2倍は□ □は分数では½
- の3分の一は4 3は□より2多い
- 6の□分の一は2 10は13より□少ない
- 100円の□割引は30円 6と□で9
- 2より□大きい数は7 □と4では5が大きい
- 6より3大きい数は□ 9から3のぞくと□
- より3小さい数は7 □から4とると3残る
- は3の2倍 8を□でわると2
- 8は□の4倍